

てから二カ月が過ぎた昭和二十一年六月九日に、ようやく復員船に乗船する事ができました。

船は午前十時頃海に出て、だんだんと黄色の水から青色に変わって来ました。困ったことは、食事が飯盒の中皿一杯が二日分の食料であり、考えながら二日分に分けて食べました。

引揚げ港は、長崎県の針尾港で二時間程停泊し、その間検疫検査を受けた後に上陸できました。懐かしい日本の地に足を踏みしめて涙が止まりませんでした。

所持品の消毒、復員局からの支給品を頂き、郷里に向かう列車に乗り込みましたが、途中の家々は戦災に遭って無残な状況でありました。

我が郷里の福岡県大牟田市も我が家も、恐らく戦災で壊滅しているのではないかと思っていました。大牟田駅に降りると一面焼け野が原で、遙か彼方まで見渡せる状況でした。我が家の近くまで来ると、この一帯は戦災から逃れて我が家は無事残っていました。

大牟田市の空襲が酷かったのは、荒尾に軍の火薬工場等軍事工場が多かったからではないかと後で聞か

れました。

暫く休息の後、召集される前に勤務していた三井鉱山万田鉱に復職することになりました。昭和二十七年、同社を退職し酒類の小売店を開店しました。その後この店も息子に譲り、現在は地区の諸々の事業のボランティアを行なっています。

山砲兵第十九連隊から

第十三軍復員本部勤務へ

愛知県 高野 甲 作

農家の六男として、男五人女一人の兄弟の末男として生まれ、生家は稲作主体で、十反歩の耕作面積の経営規模の農家でした。地元大積小学校を出ると、名古屋の木工関係の工場に働きに出ました。工場の仕事は新建材の天井板の貼布作業でした。

そこで一、二年働いた後、故郷新潟県の郷里から二〇キロ程離れた柏崎の軍需工場に勤務しました。ここ

は当時「挙国一致」「一億一心」で戦勝を期して生産に励んでいた時期で、我々の製作していたのは軍用機エンジンの主要部分であるピストンリングの製造工場であって、リングの研磨作業に従事していました。働き甲斐を身近に感じながら、一生懸命に働きました。

日曜休日になると同村出身者と連れだって柏崎から大積村までの二〇キロもある道を歩いて帰郷しました。現今の青少年が学校を卒業し就職すると同時に通勤用の乗用車を購入してもらって通勤するのと比較すると、全く雲泥の差を感じます。

昭和十九年九月一日、現役兵として、当時中支那に駐屯していた山砲第十九連隊要員として仙台歩兵連隊に入営しました。

昭和十九年当時は全国民は戦勝を固く信じて突き進んでいましたので、入営の栄誉の感激を全身で感じ営門を潜りました。

入営と同時に中支に駐屯していた原隊に追及のため仙台を出発、下関に向かったの列車輸送に移りまし

た。この列車輸送は、当時の国鉄ですから新幹線もなく、急行列車でも仙台から下関まで丸五日も要しました。防諜上車窓は閉じたまま、開けることを禁じられたままの運行です。途中、密閉した窓を一瞬開けたことで輸送指揮官の鈴木少尉殿から烈しいお叱りを受けました。少尉殿はまだ若い人でしたが、厳格な人でした。

当時は下関はじめ各港から出発した輸送船が、次々と港を出港した直後、港外の敵潜水艦に撃沈され、多くの人員、兵器が犠牲を生じていた時期でした。しかし下関から釜山の間は連絡船でしたが、敵潜の攻撃を受けることもなく無事に釜山港に上陸できました。

釜山から列車輸送に移りました。釜山―京城（ソウル）―鴨緑江―山海関―北京―南京と、長い長い列車輸送が続きました。そして南京―武昌の間は船舶輸送に替わりました。今までの車窓に映る大陸の風景と異なり、揚子江の兩岸の遠い風景と渦巻く揚子江の濁流のすさまじい滔々たる流水に目を奪われました。

長い長い原隊追及の輸送の旅が終わり、補充の初年兵は中支岳州に近い長安で山砲兵としての初年兵教育を受けました。初年兵教育も緊迫した戦局の影響を受けて教育期間も短縮され、従来の六カ月が二分の一の三カ月で行われ、砲手と弾薬手に区分され、私は弾薬手としての教育を受けました。弾薬手としては各種信管に関する種別、特性、着弾距離による装薬の分量等むずかしい教育が填め込まれます。教育期間の内務班の古兵の人々も一緒に起居を共にしましたが、初年兵に対する体罰を受けることは少なかったと思います。この時期になると体罰禁止の上司の方針が隊内に浸透したためか、山砲隊の隊員は砲と運命を共にする。砲側精神徹底のためであったのか、お陰で体罰は少なくて済みました。

教育も終わった昭和二十年二月頃から初年兵教育隊も、部隊が参加している湘桂作戦に参加するための追及行軍が始まりました。この付近は路面は砂利がないため、道路は乾燥のためか山頂付近に選定されていて、雨が降ると低地の谷間の湿地等は泥濘道になり、

腰まで埋没する所もあり、その難状は筆舌に絶するものがありました。

日中は敵機の来襲を避け、部落が山間に退避し、夜間行軍が続きました。行軍中前者との距離を保って行進することが、悪路のため難しく苦勞しました。

行軍中食糧の補給がほとんど途絶えたため食糧確保が大変でした。自分の主食、副食を自給して行軍を続けなければならず、寸暇を利用して行軍路線の近くの部落、民家を食を求めて探し回りました。途中敵襲を受けて逃げ回ったことも数回ありました。ために部隊命令で単独行動は厳禁されていました。

こうした難行軍を続け岳州に到着しました。岳州の夜景の美しかったことを思い出します。部隊は、その後さらに奥地へ前進を目指して準備中、急遽反転命令が下りました。岳州から遠く上海まで反転移動することになりました。この移動は貨物列車で行われました。終戦直前の混乱期の反転移動です。困難な移動でした。

移動後、第十三軍司令部へと転属命令を受け呆然としました。何が何だか全く予想もつかない事態となりました。こんな混沌とした時に終戦を迎えました。

終戦後、第十三軍司令部内に復員本部ができて、私は復員本部要員に編入され、各復員部隊と復員本部の間の伝令要員に編入されました。上海での終戦後の給与は、上海は前線とは異なり物資も豊富であり加えて軍司令部でもあり比較的恵まれておりました。

復員は復員業務に携わった関係か比較的遅く、昭和二十二年六月、階級は兵長に進級していました。

復員後、大積村に帰って、父や祖母は元気で迎えてくれました。村内の製材所の作業で山に行つて、伐採作業や木材の搬出作業や建築工事の雑役作業等なんでも手伝つて働きました。

父の薦めで名古屋に出て働くこととなり、当初はヤミ市場で商人達の取り扱う商品をリヤカーに積んで運ぶ小運搬業から始めました。次いでオート三輪車を購入、免許も取つて小運搬業として働きました。

昭和二十七年、故郷新潟県の隣村の女性と結ばれ、二人の娘の父親として働きました。残念な事に昭和五十七年妻に先逝され、現在も一・五トン車を自分で運転し、建築資材等の小運搬を業として働いています。家は現住所へ新築し、独身の娘二人と三人で暮らしています。現在七十七歳ですが、月に半分は働いて頑張っています。

うすれ行く記憶の中から

忘れざる八月十五日の回想

愛知県 水野 清次郎

平常の長沙の朝は静かでした。不寝番や歩哨に立つた早朝など、半ば崩れた土壁の門の外を見ると、早起きのリヤンミン（良民）が、野菜や果物などを天秤棒で担つたり、ヤンチョ（洋車）を小さくしたような一輪車に商売物を積んで売り場所へ出て行く者が三々五々歩いてる位であったのです。